

マネージメント情報

※アメリカとカナダの搾乳ロボット事情【カナダ編-#3】

【6/1】…3 軒目 Benner Holsteins 牧場

この牧場はブリーダーで Royal Winter Fair でチャンピオンをとったことがあり、ご主人(61 才)と息子さん 2 人、ロボット牛舎担当の女性の従業員さんの 4 名でタイストール牛舎 80 頭、ロボット牛舎 290 頭を管理していました。基本的に 290 頭のロボット牛舎の管理を女性従業員の方が 1 人で行き、それ以外の管理をご主人と息子さん 2 人でやっているとのことでした。

また、定期的に農場のインデックス上位牛から採卵を行い下位の牛に移植をして牛群の改良をおこない、日本では考えられませんが生まれてきた♂牛を一般の酪農場に本交用の種雄牛として 12 ヶ月令前後で年間 50 頭程販売していました。

このように、タイストール牛舎で搾乳をしながらフリーストール牛舎で搾乳ロボットを導入して酪農をしています。搾乳ロボットの導入に際し、こうでなければならないというのではなく、さまざまな、自由なバリエーションがあるということでしょうか？

ご主人が面白いことを言われたので紹介します。

「おおよそ 8 年周期で大きなイベントがあった(牛舎新築)」とのこと。彼の酪農は 8 年(10 年前後)で大きな投資をして大きくなってきたそうです。農場の歴史を簡単に説明していただきました。

- 1962 年…20 頭で酪農を始める
- 1971 年…60 頭
- 1992 年…120 頭
- 2001 年…160 頭(ここまで繋ぎ牛舎)
- 2009 年…ロボット導入…A3×4 台、2017 年 5 月に A4×1 台増設し全部で 5 台になる
- 2016 年…哺育舎と育成舎新築

20 頭/部屋…×6 部屋(教室型)…90 頭哺乳

みなさんの農場も節目となるイベントを書き出してみると面白いことがわかるかもしれませんね。

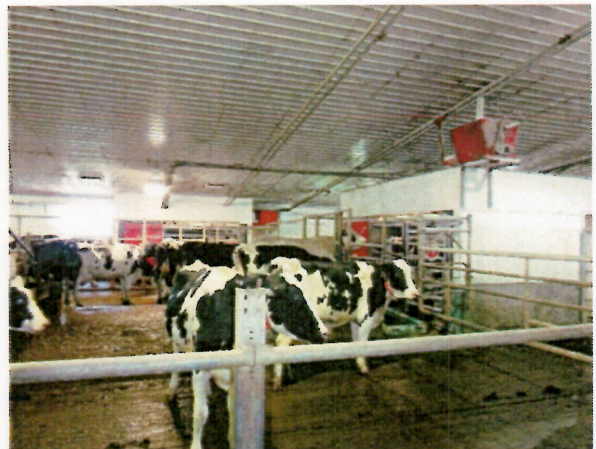
私が担当している搾乳ロボット 4 台の Y 農場さんも、ロボット牛舎の 240 頭に関しては 1 人で通常管理していますので、給餌や分娩、病畜の管理を除けば通常の一般管理は 1 人で十分可能ということ。です。

またこの農場は全ての牛舎が繋がっていて、雨に当たらずに全ての牛舎と行き来できていました。

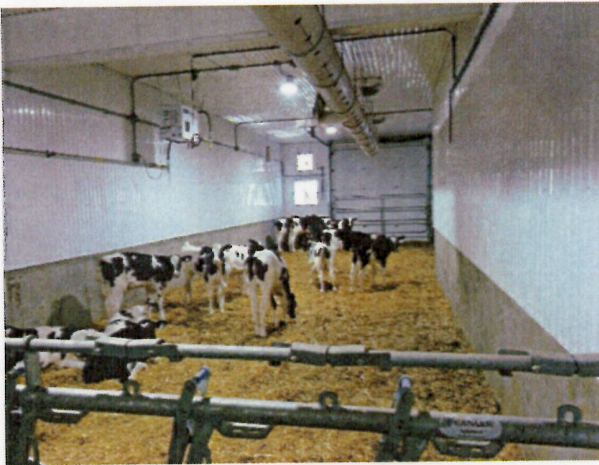
【オーナーの Benner さんと 80 頭タイストール牛舎】



【ロボット牛舎】



【哺乳牛舎①】



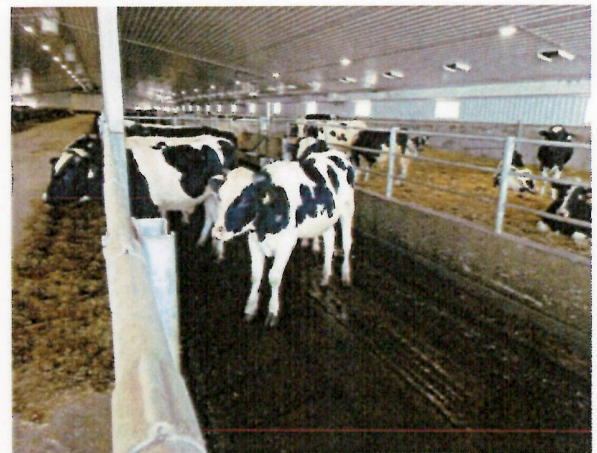
【育成牛舎】



【哺乳牛舎②】見えるドアがペンへの入り口



【種雄牛候補の育成牛♂のペン】



【6/1】…4 軒目 Trehane Holsteins 農場

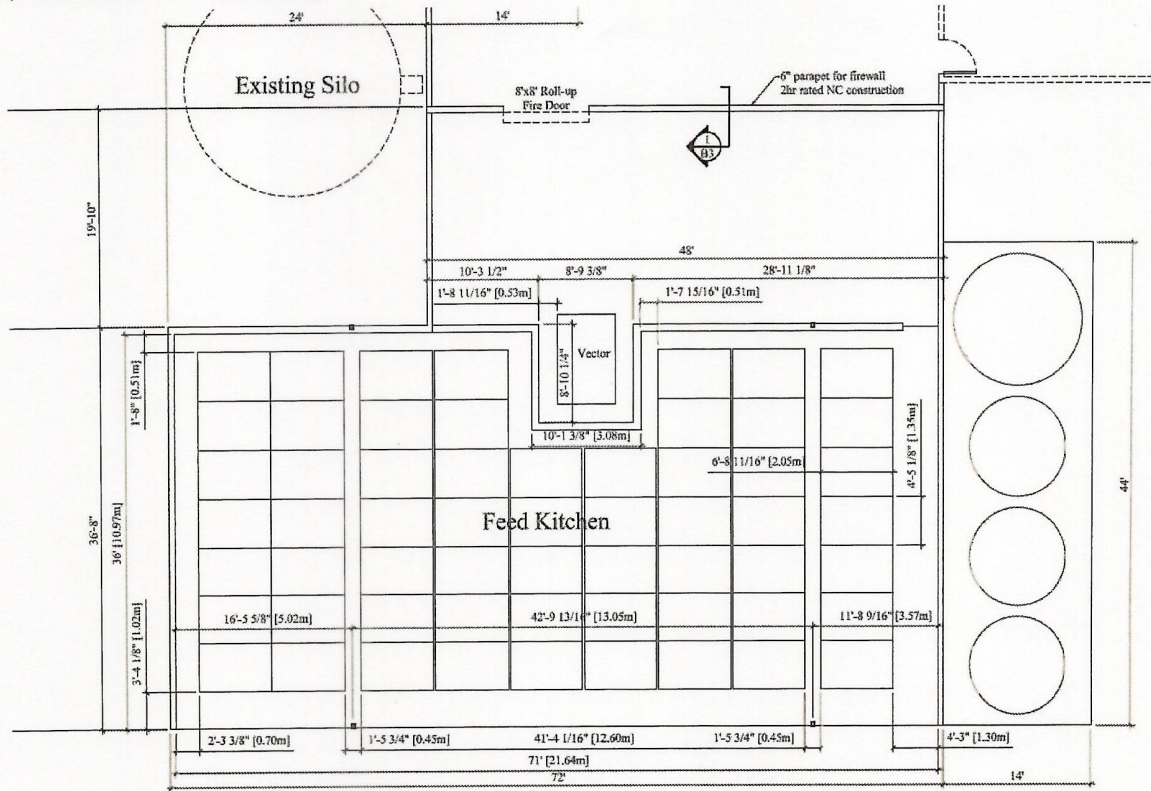
この農場がカナダの視察の最後の農場だったのですが、やっと私が探していたといいますか、期待していた搾乳ロボット農場でした。

というのは、別海にある普通の自然換気フリーストール(コールドバーン)牛舎に搾乳ロボットを導入していたからです。工夫は必要ですがどんな農場にも搾乳ロボットを導入できるということを証明してくれていました。

2011年に牛舎を新築し搾乳ロボット Lely A3×2 台導入、2014年に Lely Vector feed grabber and feeding mixing robot (これはフィードキッチンと呼ばれる TMR 調整スペースにバンカーからサイレージを運んでくるだけで後はロボットが TMR を調整し、且つ自動で給餌するシステムです) 導入。2017年2月に育成牛舎を搾乳ロボット牛舎(フリーバーン)に改造し Lely A4 を1台導入し、合計140頭の搾乳を行っていました。(育成牛を含めた総頭数250頭)

また、視察当日はご両親は休みを取って1週間ほどクルーズに出掛けていて22才の息子さんとパートの方と2人で全ての管理をしていました。ここに至るまでには紆余曲折があったのかもしれませんが、優雅な酪農経営をしているんだなあ～と感じました。

【フィードキッチンの平面図】



1 Feed Kitchen Floorplan
B2.1 N.T.S.

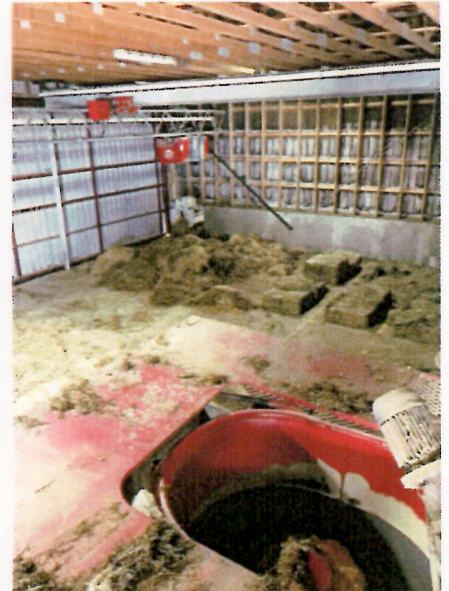
【 Feed Kitchen ① 】



【 Feed Kitchen ② 】



【Feed Kitchen③】



お世話になった Lely の Rich さんにこのシステムの完成度を聞くと 80%とおっしゃっていましたので、まだまだ改良の余地があるようですが、現状でもそれなりに稼働しているのかと思います。このシステムはまだ日本では輸入の対象にはなっていないようですが、酪農現場での自動化とい

うのは日進月歩で進んでいることは間違いないのでしょう。

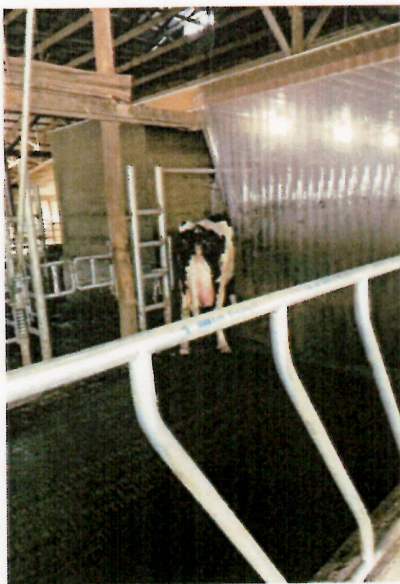
<https://www.lELY.com/the-barn/feeding/vector/>

【育成牛のフリーバーンを改造して搾乳ロボットを導入した牛舎…殆ど外です】



奥のプラスチックのカーテン(スーパーの鮮魚コーナーの出入り口になる感じのカーテンです)で仕切られているだけで、ここから牛は自由にロボットのところに行って搾乳してまたぐって出てきます

【牛が入って行くところ】



【内部①】



【内部②】



こんな簡単な構造で搾乳ロボットが導入できています。
但し、ロボットの回りは凍結しないように工夫がされています。

【ロボット機械室】

機械室はしっかり施工されています。

補助的な暖房の意味で隣接する牛舎の暖かい空気を換気扇で入れています。ちょっとした工夫で機械室の凍結を防いでいます。

お金をかけるところにはしっかりとお金をかけて、節約するところは節約するという考え方がはっきりしています。

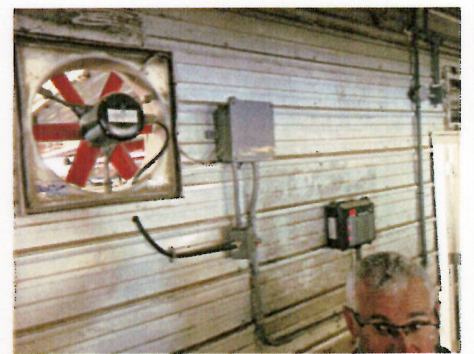
【ロボット機械室①】



【ロボット機械室②】



(この程度の簡単なファンです)



.....

・最後の Trehane Holsteins 農場いかがでしたか？ 私的には目から鱗で今回カナダまで来た甲斐があったと感じた農場でした。根室の全ての既存のフリーストール牛舎に搾乳ロボットの導入が可能だということを確認した瞬間でした。

また、今回の1軒目の Benner Holstein 農場は80頭搾乳の繋ぎ牛舎はそのままアドオンでロボット牛舎で290頭の搾乳をしているというのも興味深かった農場でした。

酪農に教科書は無いと言いますが全くその通りです。各々に合った自分のやりたいやり方でやればいいだけです。

現在クラスター事業が規模拡大の主な補助事業になっていますが、酪酪事業という小規模農場を対象とした省力化事業もありますので、その気になればどのような規模の農場でも搾乳ロボットや、皆さんなりに考える省力化が可能なのではないでしょうか？

最後に、一週間休暇を取って夫婦水入らずでクルーズに出かける日が来るのが楽しみです！と思ったください。